

(6) 言葉の特徴やきまりに関する事項

従来〔言語事項〕で示されていた内容の大部分は〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「イ言葉の特徴やきまりに関する事項」に引き継がれている。

今回の改訂では、「イ言葉の特徴やきまりに関する事項」の中に、言葉が果たす多様な働きや特徴を理解させるために「言葉の働きや特徴に関する事項」（小学校）、「言葉の働きや特徴、言葉遣いに関する事項」（中学校）が新設された。

ア 語句解説及び留意点（学習指導要領解説国語編より）

○「言葉の働きや特徴に関する事項」（小学校）

小学校低学年

(7) 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。

※事物の内容や自分が経験したことを表現したり伝達したりする働きが、日常的に使用している言葉にあることに自ら気付くような指導を行うことが大切である。

(4) 音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと。

アクセントによる語の意味の違い 「橋」と「箸」、^{はし}「雨」と「飴」^{あめ}など、同音の語でもアクセントによって意味が異なる場合があること。

※平仮名や片仮名は、^{はつ}拗音の表記などを除けば、一文字が一音節（拍）に対応する文字である。漢字はそのような表音文字ではなく、個々の文字が音と意味とを備えている。この段階では、平仮名、片仮名、漢字のそれぞれの文字体系の特徴に気付かせるように指導することが重要である。

(7) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。

意味による語句のまとまり ある語句を中心として、同義語や類義語、対義語など、その語句と様々な意味関係にある語句が集まって構成している集合のこと。例えば、果物の名前を表す語句、気持ちを表す語句などは、相互に関係のある語句として一つのまとまりを構成している。

※使用する語句の量や範囲を広げながら、語句相互の意味関係を理解するようにして、同義語、上位・下位語、同音異義語、多義語などの学習に発展させる指導が求められる。

小学校中学年

(7) 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。

※人間は、意味を持った言葉を組み合わせることによって、考えを深めたり高めたりすることができる。また、思ったことや考えたことを、物語や詩歌、説明や報告などの文章にまとめ、他の人に伝えることができるのも、言葉の働きによるものである。感想や意見を伝えたり共有したりするためには、適切な言葉によって表すことが大切であることにも気付かせる。

(4) 漢字と仮名を用いた表記などに関心をもつこと。

※漢字と仮名とでは、音節との関係や書き表す語の種類など、文字としての性質や役割が異なっている。そのような性質や役割の異なる漢字や仮名を交ぜて書く「漢字仮名交じり文」という日本語の表記の仕方に関心をもつように指導し、交ぜて書くことの利点に気付いたり、句読点を含め読みやすい表記を考えながら書いたりする言語感覚の基礎を養う。

小学校高学年

(7) 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。

※音声は、発せられた途端に消えていくので、話し言葉はさかのぼって内容を確認することができない。このことによって、複雑な構文や誤解されやすい同音異義語を避けるなど、様々な表現上の特質が生まれる。聞き手や場面の状況の影響を強く受けながら表現及び理解が進められるという特質もある。

※書き言葉は、読み手が文や文章を繰り返し確認することができる。使用される語彙や、文や文章の構造なども話し言葉と違いがある。また、「器官」と「機関」、「機械」と「機会」など、意味の違いを漢字の使い分けで表すことができる。こうした両者の違いについて気付かせることは、それぞれの特質

に配慮した使い分けを身に付けるための基礎を養うことになる。

(4) 時代の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。

世代による言葉の違い 年配者と、年少者や若者には、それぞれの世代に特有の言葉遣いがあることを指す。

※時間の経過による言葉の変化の指導においては、古典に見られる過去の言葉は、現代の言葉と連続したものであること、したがって現代の言葉に置き換えなくてもそのまま理解できる部分が少なからずあることにも自然に気付かせるように配慮することが大切である。

○「言葉の働きや特徴、言葉遣いに関する事項」（中学校）

中学校第1学年

(7) 音声の働きや仕組みについて関心を持ち、理解を深めること。

※アクセント、イントネーション、プロミネンス（文中のある語を強調して発音すること）などの音声的特質が実際の多様な声を作り出し、話すことや聞くことの活動に影響していることを理解させ、生徒自身が日常の活動を振り返る契機にすることが重要である。

中学校第2学年

(7) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。

※共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことは、人々が相互の理解を進めるために不可欠な能力である。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちをもたせるようにしながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるように指導することが大切である。

※敬語については、個別的・体験的な知識を整理して体系付けるとともに、人間関係の形成や維持における敬語のもつ働きを十分に理解させる。指導に当たっては、基本となる尊敬語、謙譲語、丁寧語について理解させる。

中学校第3学年

(7) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いを理解するとともに、敬語を社会生活の中で適切に使うこと。

※言葉は、時間の経過により語形や語意などが変化していくという側面をもっている。ここでは、言葉のもつこのような性質に気付かせることで、自分たちが使っている言葉に対する興味・関心を喚起するとともに、理解や認識を深めるようにすることが大切である。

※言葉はそれを使用する世代によっても、語形や語意が異なったり使用する語彙などに差異があったりする場合がある。（例えば、若者又は年配者など、特定の年代に限って使われる言葉の存在、一人の人間でも、年代が変わることによる使用する言葉の変化、最初は限られた範囲で使用されていた言葉が、広く一般に用いられるようになる等）このような点に着目して指導することを通して、言葉が生活と密接に関連していることを実感させるとともに、実生活に生きる言葉の力を身に付けることの大切さに気付かせる。

○表記に関する事項（小学校）

小学校低学年

(イ) 長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」、及び「を」を文の中で正しく使うこと。

長音 「おかあさん」のように「のばす音」のこと。

拗音 「きゃ」、「きゅ」のように「ねじれる音」のこと。

促音 「らっぱ」のように「つまる音」のこと。

撥音 「ん」の字に当たる「はねる音」のこと。

※発音に関する指導と関連させるとともに、各領域における学習の積み重ねの中で、次第にその規則性に気付き、身に付けていくことができるようにする。

※助詞の「は」、「へ」及び「を」については、視写や聴写の指導などを繰り返し行うことによって、文の中で使えるようにすることが必要である。

(オ) 句読点の打ち方や、かぎ（「 」）の使い方を理解して文章の中で使うこと。

※句点については、入門期から、文を書く際には、文末に必ず句点を打つように指導し、文意識を育てていくようにする。読点については、文頭の接続詞などの後、主語の後、従属節の後、並列する語の後など必要な箇所につくことを理解させる。

※かぎ（「 」）については、会話文におけるかぎ（「 」）の使い方を中心にし、その他の箇所でもかぎ（「 」）が使われていることに目を向けさせていく。

小学校中学年

(ウ) 送り仮名に注意して書き、また、活用についての意識をもつこと。

※例えば、「泳いだ」の「泳」という漢字を学習する際には、「泳がない」、「泳ぎます」、「泳ぐ」のように活用させながら、送り仮名についても学習できるようにする。また、一つ一つの具体的な語の送り仮名の指導をするだけでなく、その学習を通して、活用語尾を送るという送り仮名の原則的な付け方についても理解を促して、活用についての意識をもつようにする。

(エ) 句読点を適切に打ち、また、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと。

※読点は、低学年で取り上げたことに加え、文を読みやすくまた分かりやすくするために、文脈に合わせて適切に打つことができるように指導する。

※「段落の始め」で改行することは、「B書くこと」(1)の「イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。」と併せて指導するようにする。

※会話の部分などを改行して書くことが習慣となるように指導することも大切である。

小学校高学年

(ウ) 送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

※送り仮名については、(エ)の「語句の構成」などの学習と関連付けて指導すると効果的である。

※仮名遣いについては、例えば、「鼻血（はなぢ）」と「地面（じめん）」、「みずうみ（湖）」と「みかづき（三日月）」などの区別を付けて、正しく表記できるようにする。

○語句に関する事項（小学校）

小学校中学年

(オ) 表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。

表現したり理解したりするために必要な語句を増す 語句の量を増やし使える範囲を広げていくこと。

語句には性質や役割の上で類別があることを理解する 語句の文法的な働きを、文法そのものとしてではなく、語句の使い方として類別できることを理解するということ。

性質の上での類別 物の名前を表す語句や、動きを表す語句、様子を表す語句のように類別すること。

役割の上での類別 文の主語になる語句、述語になる語句、修飾する語句のように類別すること。

※学年別漢字配当表に示された漢字は、それぞれの学年の児童の発達の段階と関連をもたせて配当しているため、当該学年に配当されている漢字と関連付けながら語句の指導をすることが大切である。

(カ) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること。

※国語辞典や漢字辞典などの使い方を理解するとともに、必要なときにはいつでも辞書が手元にあり使えるような言語環境をつくっておくことが重要である。

小学校高学年

(イ) 語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。

※語句の構成については、お米の「お」のような接頭語、お父さんの「さん」のような接尾語のほか、複合語、略語、慣用語なども含んでいる。語句の変化については、例えば、「花+畑」で「ハナバタケ」というような音の変化、「帰る+道」で「帰り道」というような語形の変化、また「物」と「物物しい」のような意味の変化などがある。このような語句の構成や変化を、意味とのかかわりを大切にしながら理解することにより、語句の使用が一層豊かになるよう指導することが大切である。

※語句の由来に関しては、ウの「(イ)仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。」に関する事項とも関連させて、語源を調べたり、和語、漢語、外来語などの区別について関心をもったりできるようにすることが効果的である。

(オ) 文章の中での語句と語句との関係を理解すること。

※実際の文章は、類義語や対義語、上位語・下位語、派生語など、語句と語句との関係に基づきながら記述されており、そのような語句相互の関係を理解することによって内容の把握を的確にすることを理解させる。また、説明的な文章、文学的な文章には、それぞれの文章を特徴付ける結び付きの強い語句同士が相互に関連し合っていることも理解させるようにする。

(カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。

※語感には、言葉の正しさや美しさだけでなく、文や文章を含めて、実際にその言葉が使われる際に、適切であるかどうかを感じ取る感覚も含んでいる。多くの文章を繰り返して読んだり、優れた表現を抜き出したりする活動を取り入れるとともに、日常生活の中での話すこと・聞くこと、書くことの中で、語感や言葉の使い方を意識するようにさせることが大切である。

○語句・語彙に関する事項（中学校）

中学校第1学年

(イ) 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くこと。

※辞書的な意味を踏まえ、思考力や想像力を働かせて文脈において具体的かつ個別的にとらえる。また、語句が文章の中で果たしている役割を考えることも大切である。

※多くの本などを読んで新しく出合った言葉を取り立て、辞書にある様々な意味から文脈上の意味を考えることを習慣化させることが大切である。例えば、語句の意味について調べたことを記録させたり、その語句を使った短文を作らせたりすることなどが有効である。

(ウ) 事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもつこと。

※日常使用している語句は、多様なレベルで語彙を形成する。使用範囲の側面から考えると、まず事象や行為など、具体的で比較的身近な事柄を表す語句が多く存在していることに気付く。さらに、それらが、実際の言語活動において、話や文章の中でどのように関連付けて使用されているか、自分が理解したり表現したりするときどのように活用すればよいかについて考えさせていくことが重要である。

中学校第2学年

(イ) 抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

抽象的な概念を表す語句 「事象や行為などを表す多様な語句」よりも、一般的で抽象性の高い語句。

類義語 別の語でありながら、その表す意味が似ていたり、ほとんど同一であったりする語。

対義語 意味の上で互いに反対の関係にある語。

同音異義語 音が同一であって意味の異なる語。

多義的な意味を表す語句 一つの語句が多くの意味をもつもの。

※このような語句について理解させ、話や文章の中で適切に使用させることが、語彙を豊かにし語感を

磨かせることになる。

中学校第3学年

(イ) 慣用句・四字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

和語 古くから日本で使われてきた語。

漢語 漢字の音を使った語。

外来語 中国語以外の外国語から日本語に入ってきた語。

※語彙が豊かになるにつれて、語句と語句との意味の違いが微妙なところまでつかめるようになる。こうして語感が磨かれると、一つ一つの語句について、他の語句に置き換えたり置き換えられなかったりすることに気付くようになる。そのことを、書くときや話すときに役立てられるようにしていくことが大切である。

○文及び文章の構成に関する事項（小学校）

小学校低学年

(カ) 文の中における主語と述語との関係に注意すること。

主語と述語との関係 主語と述語との照応関係。

※文の意味を明確に伝えるためには、主語と述語とが照応することが大切であるということについて、文章を読んだり表現したりするとき強く意識できるように指導をすることが必要である。

小学校中学年

(キ) 修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。

※主語と述語に加え、修飾と被修飾との関係をはっきりさせるとともに、「だれが」、「いつ」、「どこで」、「なにを」、「どのように」、「なぜ」などという文の構成について、初歩的な理解ができるようにする。

(ク) 指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使うこと。

※指示語や接続語は、文や文章の構成にかかわる語で、文章の論理的な関係を構築する上で大切な役割を果たしている。読みの指導の中では、文相互の関係とともに段落相互の関係を端的に示す手掛かりとなるものとして指導する。また、文章を書く様々な機会をとらえて、文脈に沿って指示語や接続語の役割を理解し、使うことの指導を工夫するようにすることが大切である。

小学校高学年

(キ) 文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。

※構造からみて、単文・重文・複文に分けたり、性質や機能からみて、平叙文、呼びかけや疑問、応答を表す文、命令や承諾を表す文、推定や伝聞を表す文、感動や感嘆を表す文に分けたりすることなどが考えられる。

※文章の構成が目的に応じて決定されており、それらに合わせた構成を理解するようにする。

○単語、文及び文章に関する事項（中学校）

中学校第1学年

(イ) 単語の類別について理解し、指示語や接続詞及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意すること。

単語の類別について理解する 単語がその性質から自立語と付属語とに大別されること、更に幾つかの品詞に分類されることなどについて理解すること。

指示語 物事を指し示す働きをもつ語で、いわゆる「こ・そ・あ・ど言葉」と言われるもの。代名詞、連体詞、副詞、形容動詞などの品詞にわたる。

- 接続詞** 前後の文節や文などをつなぐ働きをもつ語で、いわゆる「つなぎ言葉」と言われるもの。
- 指示語と同じような働きをもつ語句** 代名詞や連体詞などを伴って全体として指示語の機能をもつ語句のこと。また、「以上(は)」、「右(の)」などの名詞。
- 接続語と同じような働きをもつ語句** 一部の副詞や名詞、連語など。
- ※指導に当たっては、実際の話や文章の中でとらえさせることが重要である。

中学校第2学年

- (f) **文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えること。**
- 文の成分の順序** 文を組み立てている主語、述語、修飾語、接続語、独立語などの並ぶ順序、語順のこと。
- 照応** 主語と述語の照応や修飾語と被修飾語の照応などのこと。
- 文の構成などについて考えること** 語順や語の照応によって表現がどのように変わってくるかを、様々な文型について考えさせること。
- (g) **単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること。**
- ※単語の類別と関連付けながら、自立語で活用があり単独で述語になる単語、自立語で活用がなく主語になる単語、自立語で活用がなく主語になれない単語、付属語で活用がある単語、付属語で活用がない単語などについて理解させる。
- ※助詞や助動詞を使うことによって、言語生活の上で互いの伝え合いたい微妙なニュアンスを、相手によりよく伝えることができることに気付かせる。また、日常の言語活動を具体的に取り上げ、助詞や助動詞が文脈の中でどのような働きをしているかに注意させ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことに役立たせるようにすることも大切である。
- (h) **相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。**
- 相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがある** 話や文章は、誰に向けて、どのような目的で話すのか、書くのかということに応じて、それにふさわしい形態や展開があるということ。
- ※話や文章の形態としては、例えば、事実や事柄を伝える説明や記録、手紙などの通信、感想や意見などが挙げられる。

○言葉遣いに関する事項（小学校）

小学校低学年

- (4) **敬体で書かれた文章に慣れること。**
- 敬体** 文末が「です」、「ます」又は「でした」、「ました」などのようになる文体。
- 常体** 文末が「である」、「であった」などのようになる文体。
- ※入学して初めて出会う教科書の敬体の文章に読み慣れるようにすることが必要である。最初は、文末の表現に注意させて読み慣れるようにし、漸次自分でも使い慣れるようにしていく。次第に常体の文章も出てくるので、敬体と常体との違いについての初歩的な理解ができるように指導することも必要である。

小学校高学年

- (f) **日常よく使われる敬語の使い方に慣れること。**
- ※相手と自分との関係を意識させながら、尊敬語や謙譲語をはじめ、丁寧な言い方などについて理解することが大切である。
- ※敬語の役割や必要性を自覚してくる時期であるので、相手や場面に応じて適切に敬語を使うことに慣れるよう、児童の日常の言語生活につながる指導方法を工夫することが大切である。

○表現の工夫に関する事項（小学校）

小学校高学年

（ク） 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。

※具体的な表現の工夫には、比喩や反復をはじめとして様々なものが考えられる。擬声語・擬態語、語句の反復、誇張などは低学年の児童が読んだり書いたりする文章中にも頻繁に見られる。学年が進行するにつれて直喩、隠喩などの比喩やユーモア、また、省略、倒置、対句など構成上の工夫も多くなる。そこで、多様な文章に表れる様々な表現の工夫に気付いたり、自分の表現に活用したりするように指導することが大切である。

○表現の技法に関する事項（中学校）

中学校第1学年

（オ） 比喩や反復などの表現の技法について理解すること。

※比喩や反復に加えて、省略、倒置、対句などが挙げられる。「比喩」や「反復」などの名称と結び付けて表現の技法の意味や用法を改めてまとめて指導する。

イ 指導計画例

「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に「特定の事項をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要な場合については、特にそれだけを取り上げて学習させるよう配慮すること。」とある。

ここでは、新設された「言葉の働きや特徴に関する事項」を扱う例として小学校低学年の例を示した。また、「言葉の働きや特徴、言葉遣いに関する事項」を扱う例として中学校第2学年の例を示した。

言葉の働きや特徴に関する事項 【小学校低学年】

【〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に関する児童の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力

○日頃から詩や物語に親しんでおり、知らない言葉に出会うと意味を知ろうとしている。

◆言葉には意味によるまとまりがあることに気付く。

【身に付けさせたい力】

①言葉の意味を考えて、同じ仲間の言葉を集める。

〈国語への関心・意欲・態度〉

②言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ)〉

【単元名】「○○のことば図かん」を作ろう～仲間の言葉を集める～

【教材名】〈開発教材〉

【単元目標】

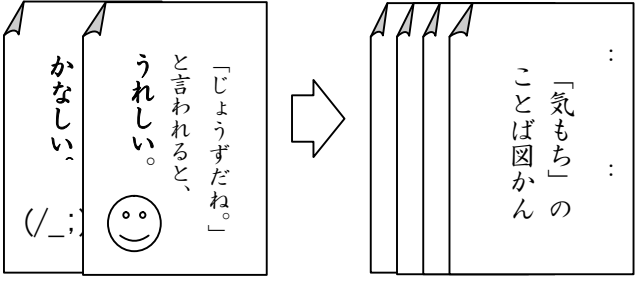
①言葉集めや言葉の分類に興味を持ち、「なかまのことば図かん」を作ろうとする。

〈国語への関心・意欲・態度〉

②言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付く。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ウ)〉

【授業の具体例】

時	評価規準	評価方法	学習活動
1 2	②言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付いている。 (言語についての知識・理解・技能イ(ウ))	ワークシート	<p>言葉を仲間分けすることに興味を持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「えんぴつ」「りんご」「ねこ」「バス」「お母さん」「おはよう」「楽しい」など、身近なもの名前や日常的に使われる言葉が書かれたカード（30語程度）を分類する。 ・分類に沿って、カードになかった言葉を考えてワークシートに付け足す。 ・分類に見出しを付け、意味の広い言葉、狭い言葉（上位語・下位語）があることを知る。 <p>『「気持ち」のことは図かん』をみんなで作る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・五味太郎著「言葉図鑑」等の紹介を聞き、「ことは図かん」のイメージを持つ。 ・気持ちを表す言葉にはどんなものがあるか話し合う。 ・「うれしい」「かなしい」などの気持ちを表す言葉をどんなときに使うか、具体的な場面を話し合う。 ・図鑑に書く言葉を分担し、用紙1枚（A5サイズ程度）に気持ちを表す言葉を使った一文と、それに合った簡単な挿絵をかく。 ・用紙を重ねて冊子にする。 
3 4	①言葉集めや言葉の分類に興味を持ち、「なかまのことは図かん」を作ろうとしている。 (国語への関心・意欲・態度)	ワークシート ことば図鑑 振り返りカード	<p>「〇〇のことは図かん」を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1時で使ったカードを参考にしながら「ことば図かん」のテーマを決め、テーマに関連する言葉を選んだり新たに見付けたりしてワークシートに書き出す。 ・同じテーマを選んだ友達と、ワークシートを示しながら言葉を紹介し合う。 ・「ことば図かん」に載せる言葉を決め、ワークシートに印を付ける。 ・「ことば図かん」の題名としてテーマを表紙に書く。用紙1枚（A5サイズ程度）に、一つの言葉（その言葉を使った主述の整った一文）と簡単な挿絵をかく。 ・言葉と挿絵をかいた用紙を重ねて冊子にする。 ・様々なテーマの「ことば図かん」を読み合い、分かったことを伝え合う。

【Cと評価した児童への手立ての例（上記の評価規準の順）】

②言葉カードの中から好きなものを一つ選ばせ、教師が仲間の言葉を提示する。同様に仲間の言葉を挙げさせた後、それらに共通することは何かを考えさせる。(イ(ウ))

①日頃の生活から関心のある事柄を教師が示唆し、それに関連する言葉を考えさせる。

(国語への関心・意欲・態度)

言葉の働きや特徴に関する事項 [中学校第2学年]

【〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に関する生徒の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力
 ○世代や年齢，地方や地域による言葉の違いや，話し言葉と書き言葉の違いを理解している。
 ◆時と場に応じて言葉を使い分ける意味を理解して言葉を使う。

【身に付けさせたい力】

- ①共通語と方言についてそれぞれの特徴を理解する。 〈国語への関心・意欲・態度〉
- ②共通語と方言の果たす役割について理解すること。 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ア)〉

【単元名】 地域の昔話から方言を見付けよう～共通語と方言の役割について考える～

【教材名】 〈開発教材〉

【単元目標】

- ①共通語と方言についてそれぞれの特徴を理解し，書き換えようとする。 〈国語への関心・意欲・態度〉
- ②共通語と方言の果たしている役割について理解する。 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ア)〉

【授業の具体例】

時	評価規準	評価方法	学習活動
1	②共通語と方言が果たしている役割について理解している。 〈言語についての知識・理解・技能イ(ア)〉	ワークシート	方言の使われている昔話を聞き，方言に興味を持つ ・地域に残る昔話の読み聞かせ（又はCD）を聞き，受けた感じを話し合う。 ・昔話の中から方言をいくつか取り出し，言葉の意味を確かめる。また，方言が使われている意味を考える。 方言の使われている昔話を共通語に書き換える ・地域に残る昔話をグループで一つ選んで数行ずつ担当し，他の地域の人が読んでも分かるように共通語に書き換える。 ・方言で書かれたものと共通語に書き換えたものを読み比べる。他のグループが担当した昔話も交換して読む。 ・読み比べたことを基に，方言でないと伝わりにくいもの，共通語だからこそ伝わるものなど，それぞれの特性について話し合う。 ・共通語と方言との違いについて考えたことをまとめる。
2	①共通語と方言についてそれぞれの特徴を理解し，書き換えようとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉	書き換えた昔話 振り返り用紙	

【Cと評価した生徒への手立ての例（上記の評価規準の順）】

- ②方言で書かれた部分を共通語に書き換えたものを提示し，感じ方がどのように異なるか考えさせる。〈イ(ア)〉
- ①方言の使われたものと共通語に書き換えたもののどちらが好きか選ばせ，その理由を考えさせる。
 〈国語への関心・意欲・態度〉

(7) 文字（小学校）・漢字（中学校）に関する事項

漢字の指導については、日常生活（中学校では社会生活）や他教科等の学習における使用や、読書活動の充実に資することを重視して改善を図っている。

ローマ字の指導については、情報機器の活用や他の学習活動等との関連を考慮し、従前の第4学年から第3学年に移行している。

ア 語句解説及び留意点（学習指導要領解説国語編より）

小学校低学年

(7) 平仮名及び片仮名を読み、書くこと。また、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。

片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと 擬声語や擬態語、外国の地名や人名、外来語など片仮名で書く語がどのような種類の語であるかを知り、実際に文や文章の中で片仮名を使うこと。

(イ) 第1学年においては、別表の学年別漢字配当表（以下「学年別漢字配当表」という。）の第1学年に配当されている漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこと。

漸次書き、文や文章の中で使うこと 学習した漢字を習得できるように少しずつ練習を重ねるとともに、実際の文や文章で使うようにすること。

※第1学年の配当漢字には、象形文字や指事文字が多く含まれているので、漢字の字形と具体的な事物（実物や絵など）とを結び付けるなどの指導を工夫し、漢字が表意文字であることを意識しながら、漢字に対する興味や関心を高められるようにする。

※漢字単独の読みだけではなく、文や文章の中で漢字を読むことも大切にして、文脈の中での意味と結び付けていくようにする。

(ウ) 第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

小学校中学年

(7) 第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。

日常使われている簡単な単語 地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のこと。

(イ) 第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

※「(ウ)漢字のへん、つくりなどの構成について知識をもつこと。」と関係付けながら、漢字の読み書きに関する指導を進める。

※漢字辞典の使い方に慣れてきたら、自分で新出漢字の読みや意味などを調べる活動も取り入れるようにする。

※中学年は、漢字による熟語などの語句が増加する時期でもある。文や文章を書く際には、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、当該学年の前の学年までに学習した漢字を意識して使ったりする習慣を付けるように指導することが大切である。

(ウ) 漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと。

小学校高学年

(7) 第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

※高学年は、漢字による熟語などの語句の使用が増加する時期でもある。文や文章を書く際には、漢

字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、「収める」、「納める」、「治める」などの同音異義語に注意して使ったりする習慣を付けるように指導する。

(4) 仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

※仮名や漢字がどのように形成され、継承されてきたのかなどについて基本的な知識をもつこと、また、表音文字としての平仮名や片仮名、表意文字としての漢字の特質を理解すること、文章が漢字仮名交じりで表記されていることや、漢字には原則として音と訓の読み方があることなどをまとめた知識として整理することなどである。

中学校第1学年

(7) 小学校学習指導要領第2章第1節国語の学年別漢字配当表（以下「学年別漢字配当表」という。）

に示されている漢字に加え、その他の常用漢字のうち300字程度から400字程度までの漢字を読むこと。

※漢字を読む能力としては、漢字一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことができるようにすることが求められる。そのため、教科書を読むことや読書を通して、漢字の読みの習熟と応用を図ることが大切である。

※字形と音訓、意味と用法、語の成り立ち、熟語の構成などについて必要に応じて指導し、例えば、漢字の構成要素である「へん」や「つくり」などに注目して、読みを類推することができるように指導することが大切である。

※書くこと、読むことの中だけではなく、話すこと・聞くことの指導においても、例えば、同音の語句の意味に誤って理解されそうなどときには、漢字を例示することでこれを避けるといったような活動を取り入れるなど、機会あるごとに漢字を意識させるように配慮することが大切である。

(4) 学年別漢字配当表の漢字のうち900字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

※字体、字形、音訓、意味や用法などの知識を得させ、文脈に即して漢字を書くように常に注意しながら学習させることが大切である。

※文章の中ばかりではなく、話すこと・聞くことの学習の中や、他教科の学習や日常の会話の中でも漢字の書きについて意識させるようにする。

※漢字を書く力を養うためには、実際に書く活動を通して、漢字を正しく用いる態度と習慣とを養う。そのためには、必要に応じて辞書を引くことを習慣付けることが有効である。

※漢字を書く指導では、書写との関連を図ることが大切である。

中学校第2学年

(7) 第1学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字のうち350字程度から450字程度までの漢字を読むこと。

(4) 学年別漢字配当表に示されている漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

中学校第3学年

(7) 第2学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字の大体を読むこと。

(4) 学年別漢字配当表に示されている漢字について、文や文章の中で使い慣れること。

※学年別漢字配当表に示している1,006字の漢字は、他教科の学習や社会生活において使用することの多い漢字であり、第3学年が終了するまでに、多様な語句の形で使ったり、様々な文脈の中で使ったりすることができるよう指導する。

イ 「指導計画の作成と内容の取扱い」について（小学校学習指導要領解説国語編からの抜粋）

(7) 学年ごとに配当されている漢字は、児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて、当該学年以前の学年又は当該学年以降の学年において指導することもできる。

※第2学年の漢字の指導の際、「昔話」や「自転車」のように、「話・自」は第2学年、「昔・転」は第3学年の配当漢字であり（「車」は第1学年）、配当学年が異なる漢字で構成されている熟語が出てくる場合がある。そのとき、第2学年であっても、必要に応じて「昔話」、「自転車」などのように漢字の熟語として提示してよい。その際、(4)の事項と関連して、児童の学習負担が過重にならない

よう配慮が必要であり、後の学年の配当漢字である「昔・転」については、振り仮名を付けて「昔話」「自^{てん}転車」のように提示することになる。

- (イ) 当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができる。

ウ 指導計画例

「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」に「特定の事項をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要な場合については、特にそれだけを取り上げて学習させるよう配慮すること。」とある。ここでは、実際指導する場面の多い、「文字に関する事項」のみを扱う例として小学校中学年と中学校第1学年の2例を示した。

文字に関する事項 [小学校中学年]

【〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に関する児童の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力

- 提示された漢字は積極的に使おうとする。
- 部首について、いくつかの種類があることを理解している。
- ◆漢字に興味を持ち、文章の中で適切に漢字を使う。
- ◆部首に意味があることを知らないで漢字を使っている。

【身に付けさせたい力】

- ①部首に興味・関心を抱き、部首や漢字の成り立ちの物語を作ろうとする。〈国語への関心・意欲・態度〉
- ②漢字のへん、つくりなどの構成についての理解をすること。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ウ(ウ)〉

【単元名】 部首や漢字の成り立ちの物語を作ろう～漢字の構成について理解する～

【教材名】 〈開発教材〉

【単元目標】

- ①選んだ部首や漢字の成り立ちの物語を作ろうとする。 〈国語への関心・意欲・態度〉
- ②漢字のへん、つくりなどの構成について理解をすること。 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ウ(ウ)〉

【授業の具体例】

時	評価規準	評価方法	学習活動
1	②漢字のへん、つくりなどの構成について理解している。 〈言語についての知識・理解・技能ウ(ウ)〉	ワークシート	部首や漢字の成り立ちに興味を持つ ・漢字の成り立ちについて説明した文章を読む。 ・漢字辞典で成り立ちを確認する。 ・他の部首や漢字の成り立ちを漢字辞典などを使って調べる。
2	①選んだ部首や漢字の成り立ちを物語にしようとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉	ワークシート	漢字の成り立ちを物語にする ・見本を参考にしながら、自分の選んだ部首や漢字の成り立ちを前時に調べた内容を基に物語にする。 ・グループで交流し、自分が調べたもの以外の漢字の成り立ちを知る。

【Cと評価した児童への手立ての例（上記の評価規準の順）】

- ②分かりやすい漢字と一緒に漢字辞典を引き、成り立ちが書いてあるところを確認する。〈ウ(ウ)〉
- ①「辞書に書いてあることそのままでもよいから書き出そう」と声掛けをする。〈国語への関心・意欲・態度〉

文字に関する事項 [中学校第1学年]

- 【〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〉に関する生徒の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力
 ○国語の授業では、分からない漢字などは国語辞典を使って調べる。
 ◆小学校で学習してきた漢字を、各教科でのノートや班日誌等、日常生活で使う。

【身に付けさせたい力】

- ①できるだけ多くの漢字を使って文章を書けるよう、普段使わない漢字への興味・関心を高める。
 〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②学年別漢字配当表に示されている漢字について、文や文章の中で使い慣れること。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ウ(イ)〉

【単元名】 お気に入りの物語の写本を作ろう～文や文章の中で漢字を使い慣れる～

【教材名】 〈開発教材〉

【単元目標】

- ①漢字への興味・関心を高め、できるだけ多くの漢字を使って物語を表記しようとする。
 〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②学年別漢字配当表を活用し、既習の物語文をできるだけ多くの漢字を使って表記する。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ウ(イ)〉

【授業の具体例】

時	評価規準	評価方法	学習活動
1	②学年別漢字配当表を活用し、既習の物語文をできるだけ多くの漢字を使って表記している。 〈言語についての知識・理解・技能ウ(イ)〉	ワークシート	平仮名を漢字に書き直すことに興味を持つ ・「うらにわにはにわにわにはにわにわとりがいる。」 （裏庭に埴輪，庭には二羽鶏がいる。）などの早口言葉を、どこで区切って読むか考える。 ・漢字を使って書き直した早口言葉を読む。 書き直す物語を選ぶ ・既習の小学校低・中学年の物語から、写本を作りたいものを選ぶ。 ・漢字に直せそうな部分に印を付ける。 ・友達とワークシートを交換し、更に漢字に直せるところがないか助言し合う。
2	①漢字への興味・関心を高め、できるだけ多くの漢字を使って物語を表記しようとしている。 〈国語への関心・意欲・態度〉	写本	漢字を使って写本を作る ・辞書や教科書掲載の常用漢字表を使い、確かめながら漢字を使って物語を表記する。 ・どれくらい漢字が使われているか写本を読み合い、感想を伝え合う。

【Cと評価した生徒への手立ての例（上記の評価規準の順）】

- ②漢字に直す部分を見付けられない生徒には、一つの段落を使って見付け方を示す。〈ウ(イ)〉
 ①印を付けた部分から、数や段落などどこを直すか選択させて漢字に直させる。
 〈国語への関心・意欲・態度〉

文字・漢字に関する事項の参考例として、HP「あすなる学習室」(国語の部屋「文字の部屋」)がある。これを授業や家庭学習等で活用していくことも、児童に漢字に興味を持たせるのに有効である。内容は、次のとおりである。



小学校低学年	かんじでかいてみよう おなじぶぶんのあるかんじ ましがえやすいひらがな ましがえやすいカタカナ かきじゅん
小学校中学年	へんとつくり かんむりとあし かまえ たれ によろ 書き順 ローマ字のたつ人になろう 漢和辞典(じてん)を引いてみよう 読みが同じで意味がちがうことば 漢字名人になろう とくべつな読み方
小学校高学年	漢字の成り立ちを知ろう これでバッチリ仮名づかい これでキミも漢字博士 特別な読み方 日本語の文字 漢和辞典を使おう 書き順
中学校第1学年	漢字の基礎知識 漢字の部首 漢和辞典に親しもう 漢字の練習
中学校第2, 3学年	特別な読み方 同音異字と同訓異字 漢字の練習

(8) 書写に関する事項

小学校では、文字を書く基礎となる「姿勢」、「筆記具の持ち方」、「点画や一文字の書き方」、「筆順」などの事項から、「文字の集まり(文字群)の書き方」に関する事項へ、さらに、「目的に応じた書き方」に関する事項へと系統的に指導し、日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力を育成することが重要である。

中学校では、小学校の指導を踏まえ、文字を書くことに関する知識・技能の育成が、国語科をはじめとする各教科等の学習場面や社会生活における、話す、聞く、書く、読むといった言語活動に役立つようにすることが大切である。また、我が国の伝統的な文字文化やこれからの社会に役立つ様々な文字文化に関する認識及びそれらに親しむ態度の育成も大切である。

ア 語句解説及び留意点(学習指導要領解説国語編より)

小学校低学年

ア 姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。

姿勢 文字を書くときの構えのこと。

※正しい姿勢になるには、背筋を伸ばした状態で体を安定させたり、書く位置と目の距離を適度にとったり、筆記具を持ったときに筆先が見えるようにすることが重要である。

筆記具 低学年では、鉛筆やフェルトペン

持ち方を正しく 人差し指と親指と中指の位置、手首の状態や鉛筆の軸の角度などを適切にすること。

文字の形 主として文字の概形のこと。概形とは、「○、□、◇、△」などの形に類型化される文字のおおよその形のこと。

丁寧に書く 始筆から送筆、さらに終筆(とめ、はね、はらい)までを確実に書き、その積み重ねで文字の形を整えていくこと。

イ 点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。

点画 文字を構成する「横画、縦画、左払い、右払い、折れ、曲がり、そり、点」などのこと。

長短や方向、接し方や交わり方 文字を構成する点画の形状や点画相互の位置関係のこと。

長短や方向 点画の形状のこと。

※例えば、「三」の場合、仮に一画目が他の二画に比べて長すぎたり、その方向が横方向ではなくて縦方向を向いていたりすると、その文字は「三」という文字としては認識されにくいし、正しく整っているとは言えない。

接し方や交わり方 点画相互の位置関係のこと。

筆順 書き進む際の合理的な順序が習慣化したもののこと。

※学校教育で指導する筆順は、「上から下へ」、「左から右へ」、「横から縦へ」といった原則として一般に通用している常識的なもの。

小学校中学年

ア 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。

文字の組立て方 点画の組立て方から部首や部分相互の組立て方までを指す。

※中学年では部首と他の部分の組立て方、すなわち左と右、上と下、内と外などの関係において一つの文字が組立てられるという仕組みを理解することを重視する。

形を整えて書く 低学年で指導した全体の概形を意識するとともに、一つの文字の構成要素となる部分相互が等間隔であること、左右対称であること、同一方向であることなどを考えて書くこと。

イ 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。

漢字や仮名の大きさ 漢字と漢字、漢字と仮名、仮名と仮名との相互のつり合いから生じる相対的な大きさのこと。

※画数の多い文字ほど大きく書き、画数の少ない文字ほど小さく書くと、並べたときに読みやすい文字列になる。

配列に注意する 行の中心や行と行との間、文字と文字との間がそろっているかなど文字列及び複数の文字列に注意するということ。

※読みやすい文や文章を書くには、一文字一文字を整えることに加え、文字の集まりという面から整えることが重要。字数を多く書くことや、毛筆に慣れるということから小筆の活用にも配慮する。

ウ 点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

筆圧 筆記具から用紙に加わる力のこと。

※点画には、左右の払いのように筆圧を変化させて書くものや、横画のようにほぼ等しい筆圧で書くものもある。

小学校高学年

ア 用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

用紙 原稿用紙や便箋^{せん}などの書式に対応した用紙、半紙、画用紙や模造紙などの白紙に始まり、それらに準ずる布や金属、ガラスなどといった用材全般のこと。

文字の大きさ 高学年では、主に用紙全体との関係から判断される文字の大きさのこと。

※例えば、用紙全体からはみださずに書く、逆に余白をつくり過ぎずに書く、また、用紙の中で見出しの文字を目立たせる、地の文章の文字は控えめに見せるといったようなことである。

配列 高学年では、用紙全体との関係から考えられる文字の位置、字間、行間などの効果的な在り方に重点を置いている。

書く速さを意識する 書く場面の状況によって速さが決まってくることを意識すること。速く書くことが求められるだけでなく、ゆっくりと丁寧に書くことが求められる場面もある。

イ 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

目的 生活や学習活動において文字を書く様々な場面における目的のこと。

筆記具 鉛筆、フェルトペン、毛筆、ボールペン、筆ペンなどから選択する。

特徴 筆記具全体の形状、書く部分の材質や形状、色など。

ウ 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

※点画の中での穂先の動きだけでなく、点画から点画へ、更には、文字から文字へと移動していく過程に重点を置く。したがって、「穂先の動き」と「点画のつながり」とは一体化した事項と言える。

中学校第1学年

ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書^{かい}で書くこと。

字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解する 書こうとする文字の字形を整えること、紙面全体に対してそれぞれの文字の大きさや書くべき位置を考えて調和的に割り当てること、文字と文字との間の空け方や行の中心の取り方に注意すること、行と行の間の空け方に注意することなど。

イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

漢字の行書の基礎的な書き方 直線的な点画で構成されている漢字を、点や画の形が丸みを帯びる場合があること、点や画の方向及び止めや払いの形が変わる場合があること、点や画が連続したり省略されたりする場合があること、筆順が変わる場合があることなどといった行書の特徴を伝統的な文字文化として理解して書くこと。

※字形の整え方、運筆の際の筆圧のかけ方、点画のつながりなどを身に付けさせるために、毛筆の活用に配慮する必要がある。

中学校第2学年

ア **漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。**

読みやすく 読み手への伝達を意識すること。

※「読みやすく速く書くこと」は、漢字の行書とそれらに調和した仮名の書き方に慣れさせ、国語科をはじめとする各教科等の学習場面や社会生活における話す、聞く、書く、読むといった言語活動に役立たせるための重要な指導である。

イ **目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと。**

目的や必要に応じて 国語科をはじめとする各教科等の学習や社会生活における文字を書く目的や必要に応じて、その書体や筆記具を選択しつつ効果的な文字の書き方を工夫すること。

※メモやノート、届け出の書類、願書、会議録、ポスターや掲示物、はがきや封書といった様々な書式に合わせて、適切な字形や書体、筆記具で書く。

楷書又は行書を選んで書くこと 学習や生活における様々な場面において、楷書で書いた方がよい場合と行書で書いた方がよい場合とがあることを踏まえ、習得した書体に関する知識や技能を目的や必要に応じて主体的に選択し、書くこと。

中学校第3学年

ア **身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと。**

身の回りの多様な文字に関心をもつ 手書き文字だけでなく、活字やイラスト文字などの社会生活で使用されている多様な書体や字形の文字や、それらの文字の使われ方などに関心をもつこと。

効果的に文字を書く 文字の伝達性や表現性などを考えながら目的や必要に応じて書くこと。

※身の回りの多様な文字に関心をもちながら、字形を正しく整える能力、配列などを整える能力、速く書く能力、楷書や行書を使い分ける能力、筆記具の選択について工夫する能力など、小学校からこれまでに身に付けてきた書写の能力を総合的に発揮させるように指導する。

イ 「指導計画の作成と内容の取扱い」について（学習指導要領解説国語編より）

小学校

硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30単位時間程度を配当すること。

中学校

ア 文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。

イ 硬筆及び毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うようにすること。

ウ 書写の指導に配当する授業時数は、第1学年及び第2学年では年間20単位時間程度、第3学年では年間10単位時間程度とすること。

ウ 指導計画例

「日常生活や学習活動に生かす」ことに関連させた「書写に関する事項」の指導計画例として、小学校高学年と中学校第3学年の2例を示した。

書写に関する事項〔小学校高学年〕

- 【〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に関する児童の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力
 ○半紙に合わせた字の大きさを作品となる字を書いたり、小筆で名前を書いたりする。
 ○毛筆の穂先の動きと点画のつながりを意識して書く。
 ◆半紙以外の用紙において、用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決める。
 ◆日常生活の中で毛筆に触れる。

【身に付けさせたい力】

- ①言葉に合った文字の大きさや配列を考えて書こうとする態度を育てる。〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 書写ア〉

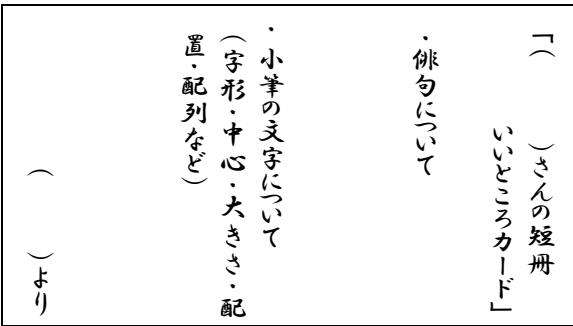
【単元名】 俳句を書こう～文字の大きさや配列を考えて書く～

【教材名】 〈開発教材〉

【単元目標】

- ①俳句の言葉に合った文字の大きさや配置、配列を考え、字形を整えて書こうとする。
 〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②短冊用紙との関係に注意し、文字の大きさや配置、配列を考え、字形を整えて自作の俳句を短冊用紙に書く。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 書写ア〉

【授業の具体例】

時	評価規準	評価方法	学習活動
1			前時の単元「短歌と俳句」で自作した俳句を、小筆で短冊用紙に書いて、校内に掲示するという学習の見通しを持つ ・自作の俳句を半紙に毛筆で試書し、字形の確認をする。 ・短冊大の用紙で、文字の大きさ、配置、配列を考える。(硬筆で書いて検討してもよい。) ・次時に向けて字形、文字の大きさ、配置、配列を意識した自己課題を明確にし、ワークシートに書き込む。
2	②短冊用紙との関係に注意し、文字の大きさや配置、配列を考え、字形を整えて自作の俳句を短冊用紙に書いている。 (言語についての知識・理解・技能 書写ア) ①俳句の言葉に合った文字の大きさや配置、配列を考え、字形を整えて書こうとしている。 (国語への関心・意欲・態度)	短冊用紙に書かれた文字 ワークシート	短冊用紙に清書をする ・前時に設定した課題に気を付けながら書く。 ・自己課題を基に自己評価する。 ・余裕がある場合は、色鉛筆などで絵を添える。 短冊用紙を友達と交換し、「〇〇さんの短冊 いいところカード」を書き交流する 

【Cと評価した児童への手立ての例（上記の評価規準の順）】

- ②整った字が書けない児童には、短冊用紙（練習用紙）に、文字を書く位置に鉛筆で印を付けて書くように指示する。〈書写ア〉
 ①自分が考えたように文字の大きさや配列を決められるよさを伝える。〈国語への関心・意欲・態度〉

書写に関する事項〔中学校第3学年〕

- 【〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に関する生徒の実態】○身に付けてきた力 ◆課題が見られる力
 ○楷書、行書手本に忠実に書く。
 ◆日常生活の中で毛筆を使い、目的や場面に合った効果的な文字を書く。

【身に付けさせたい力】

- ①書く目的や必要に応じて効果的に書こうとする態度を育てる。 〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②身の回りの多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書くこと。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 書写ア〉

【単元名】「日めくりカレンダー」を作ろう～効果的な文字や配列で書く～

【教材名】〈開発教材〉

【単元目標】

- ①自分の選んだ言葉にふさわしい書体や配列などを考えて書こうとする。 〈国語への関心・意欲・態度〉
 ②文字の伝達性や表現性などを考えて、自分の選んだ言葉を効果的な書体や配列で書く。
 〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 書写ア〉

【授業の具体例】

	評価規準	評価方法	学習活動
国語 1			<p>国語の時間を利用し、卒業までの「日めくりカレンダー」を作成していく活動の見通しを持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> 見本を提示し、書き込む項目を確認する。 (例) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p style="text-align: center;">氏名 ○ ○</p> <p style="text-align: center; font-size: 2em; font-weight: bold;">克己復礼</p> <p style="font-size: 0.8em;">3月4日(金)公立入試の日 卒業まであと14日 言葉の意味:私欲に打ち勝ち、礼儀に～ みんなへのメッセージ:試験頑張れ!</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 言葉を選ぶ。(国語便覧などを活用する。意味調べを含む。) 書体や配列を考える。(自分が選んだ言葉を大きく画用紙の上段に書く。) 太筆、小筆のよさを考え、文字により効果的に選択する。 下段は、使用したい筆記具で仕上げる。毛筆で仕上げたい場合は書写の時間に書く。
書写 1	<p>②文字の伝達性や表現性などを考えて、自分の選んだ言葉を効果的な書体や配列で書いている。</p> <p>〈言語についての知識・理解・技能 書写ア〉</p> <p>①自分の選んだ言葉にふさわしい書体や配列などを考えて書こうとしている。</p> <p>〈国語への関心・意欲・態度〉</p>	<p>カレンダー (画用紙)</p> <p>振り返りカード</p>	<p>試書で字形の確認をした後、半紙で練習をし、画用紙に書く</p> <ul style="list-style-type: none"> 行書で書く場合は、「行書の特徴」について教科書等で確認をする。 教室(前後の黒板や廊下など)に作品を掲示し、友達の作品を鑑賞する。 鑑賞カードを使用し、自分の割当ての日の前後3～4人の作品に対し、書体や配列等の評価やコメントを記入する。 カードを渡しながらか交流し、もらったカードは画用紙の裏に貼る。 自己評価を振り返りカードに記入する。 <p>(・カードを貼り終えたら回収し、学級の日めくりカレンダーを完成させる。)</p>

【Cと評価した生徒への手立ての例(上記の評価規準の順)】

- ②選んだ文字を実際の画用紙を用いて一緒に配列し、鉛筆で下書きを済ませておく。〈書写ア〉
 ①便覧のことわざ、故事成語、四字熟語などが載っているページを見せて、言葉を選んでみようとして投げ掛け、まずは言葉選びへの興味・関心を高めさせる。〈国語への関心・意欲・態度〉